



松 添 貝 塚

発 掘 調 査 報 告 書

宮崎市文化財調査報告書

第 2 集

1 9 7 4

宮 崎 市 教 育 委 員 会

正 誤 表

ページ	行	誤	正
18	No. 9	(ナガレコ)	(ナガラメ)
"	No. 10	Notohaliotis	Euhaliotis
"	No. 12	カノエガイ	カノコガイ
"	No. 12 13	あますぶね科	あまおぶね科
"	No. 13	Theiostyra	Theiostyla
"	No. 15 No. 16	Patamidibae	Potamididae
"	No. 17	Koishi	Kochi
"	No. 19	マキガイ	マガキガイ
"	No. 37	sub-renatus	subrenata
"	No. 44	strictus (GovL U)	gouldi (CONRAD)
"	陸産貝類		
	No. 2	sufa	rufa
図版	図版 (3) B区	貝石状態	B区 貝層状態
"	図版 (4) B区	土 層	D区 土 層
"	図版 (15)	土器底部及び土礎	土器底部及び土礎
"	図版 (17)	石 礎	石 礎
"	図版 (19)	鹿角製ヘアピン	鹿角製ヘアピン
巻末	宮崎市教育委員会教育課 宮崎市教育委員会 社会教育課		

は じ め に

近年開発の波が各地に押寄せており、埋蔵文化財、記念物の保存には苦慮いたしています。
本市では、昭和48年3月に発刊いたしました、石神遺跡発掘調査報告書に続き、第2集として本書を
発刊することができました。

本市中央部及び周辺には、柏田貝塚、跡江貝塚、花見貝塚といった縄文時代早期、前期の貝塚があり
ましたが、これらは既に破壊されてしまい、その姿をとどめていない現状です。また市内南部において
は、納室向貝塚、松添貝塚といった縄文晩期の貝塚があり、前者は宅造のため破壊され、松添貝塚のみ
が現存しております。

しかしながら、松添貝塚は観光地青島に近接しており、近年、ホテル、保養所及び観光施設の建設に
よって、破壊される恐れが生じています。それで松添貝塚についてしっかりした規模、性格、範囲をつ
かみ、今後の貝塚保存への基礎資料を作成するため、学術調査を実施いたしました。

調査員の方々には、調査及び原稿執筆にあたりまして、ご多忙中にもかかわらずご苦労いただき
ましたことを心からお礼申し上げます。

また、発掘調査に際しまして、土地の所有者の方々には、快よく土地を提供していただきましたこと
を深く感謝いたします。

本調査報告書が関係各位の参考となれば幸いです。

昭和49年3月

宮崎市教育委員会

教育長 田 中

栄

例 言

- 1 本書は、宮崎市教育委員会が昭和47年12月18日から12月27日まで実施した青島松原貝塚の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査には、石川恒太郎、鈴木重治、安楽勉があたり、資料整理には、別府大学生松井孝之、平之内幸治が協力して行った。
- 3 本文の執筆者の氏名は目次に明記した。
- 4 出土人骨については、新潟大学医学部小片保教授に寄稿をいただいた。
- 5 原稿執筆の段階で十分討論をもつ時間がなく、用語の統一を欠いた点がある。
- 6 挿図の作成及び写真撮影は、野間重孝がたった。
- 7 本書の編集は、鈴木重治と野間重孝がたった。
- 8 本書における図版の一部に、昭和37年度別府大学、宮崎高等学校による調査時の資料を提供いただいた。
- 9 本書における出土遺物は、宮崎市教育委員会に保管している。

昭和49年3月

宮崎市教育委員会

本 文 目 次

第1章 自然環境と周辺の遺跡	1
第2章 松原貝塚の発掘と研究史	(夕) 3
第3章 遺 跡	4
第1節 包含層の状態	(鈴木重治) 4
第2節 主要な遺構	(夕) 8
第4章 遺 物	9
第1節 文化遺物	(鈴木重治) 9
土器及び土製品	(夕) 9
石器及び石製品	(夕) 13
骨角器	(夕) 17
貝製品	(夕) 17
第2節 自然遺物	(夕) 18
貝 類	(夕) 18
獸 類	(夕) 19
魚 類	(夕) 19
第5章 人 骨	(小片 保) 19
第6章 考 察	(鈴木重治) 22
結 言	(石川恒太郎) 23

挿 図 目 次

第 1 図	松添貝塚位置図	2
第 2 図	松添貝塚地形図	4
第 3 図	土 層 図	5
第 4 図	A区出土状況	6
第 5 図	B区出土状況	6
第 6 図	C区包含層中、上部出土状況	7
第 7 図	C区包含層中、下部出土状況	7
第 8 図	B区出土、石蓋土壌	8
第 9 図	出土の土器	10
第 10 図	出土の土器	11
第 11 図	出土の土器投影	12
第 12 図	石鏃、スクレパー、石匙、重玉、石斧	14
第 13 図	石鏃、凹石	15
第 14 図	尖頭状鏃器、サイドスクレパー、磨石	16
第 15 図	貝輪、骨針、貝刃器	17
表 1	松添貝塚出土土器一覧表	18

図 版 目 次

図版 1	遺 跡 遺 景
図版 2	A、B区の発掘風景
図版 3	貝 層 状 態
図版 4	D 区 土 層
図版 5	埋没状態で出土した犬
図版 6	B区検出石蓋土壌
図版 7	A区土器の出土状況
図版 8	C区包含層上面の出土状況
図版 9	鯨骨の出土状況
図版 10	鯨骨の出土状況
図版 11	出 土 の 土 器
図版 12	出 土 の 土 器
図版 13	出 土 の 土 器
図版 14	出 土 の 土 器
図版 15	土器底部及び土鏃
図版 16	石鏃、石匙、スクレパー、重玉
図版 17	石鏃、石斧、尖頭状鏃器、凹石
図版 18	出土の貝類及び貝刃器
図版 19	鹿角製ヘヤピン、骨べら、骨針及び貝輪
図版 20	犬、イノシシ、鹿及び犬の糞石
図版 21	出 土 人 骨

第 1 章 自然環境と周辺の遺跡

日向側に面する宮崎県下の海岸線は、3区に大別される。県北部の固定公園日豊海岸がリアス式の海岸を形成して豊日山塊に対応し、県中部の変化のない長く平坦な海岸が宮崎平野を縫取り、県南部の固定公園、日南海岸が那珂阿山塊に対応して波状岩として知られる砂岩と泥板岩の互層から成る岩床を連らね、都井岬を経て志布志湾に面している。このような海岸線を持つ宮崎は、北及び西を遠く九州山脈が囲り、東と南に黒潮の北上する太平洋を控えている。この地理的な環境は、そのまま、植物相を規定し、照葉樹林を基盤にした地域性をよく示している。

一方、海岸線は常に変化するものであり、いまお生物のようにたやすく変化している。短期間では、さほど気付かなくとも、長い自然史の中で観察すると、その変化の大ききには驚くものがある。海岸線の変化は、単にそれのみにおわることなく、植物に大きな影響を与える。一例を挙げれば、内湾性の貝塚、外湾性の貝塚の差はあってもすでに絶滅した貝類が検出される。石器時代貝塚の貝類の変化はよく知られるところである。

先史時代の海岸線を想定する場合1つの目安になるのが貝塚である。結水、解水による海面の変化を中心に、隆起、沈降等の諸現象がそのまま海進、海退を生み出す。この変化は鹹水産貝塚の分布によって実証される。宮崎市近辺の貝塚によって、これをみれば、宮崎市瓜生野の柏田貝塚（縄文早期、前期）宮崎市生目の跡江貝塚（縄文早期、前期）、東諸県郡高岡町の花見貝塚（縄文前期）などは、現在の海岸線から9km〜10km程の内陸に位置している。このうち跡江貝塚の絶対年代は、放射性炭素の年代測定によって、下層のシシムからB、P、9,100±170(Gak4,414)、上層のカキ、貝イガイからB、P、6,990±125(Gak4,415)が知られている。この年代測定に従って、しかも花見貝塚の土器形式と対比して総括すれば、宮崎市の周辺においては、7,000年前を海進のピークの1時期とすることが出来る。これらの貝塚に比較して、当松添貝塚は海退期に形成された遺跡であって、はるかに現海岸線に近い。それでも発掘時の満潮汀線から計測して、最短期間300m前後に位置している。その後も徐々に海退がみられることは、弥生時代中期の土器片を現海岸に近接しているクツ子の園の園内で採集出来ることが示している。

当遺跡周辺には、多くの遺跡が確認出来るが、特に弥生時代の遺跡が多い。宮崎市の中心部から青島までの海岸線に近い部分に限ってみても、曾井、津和田、宮崎空港、本郷南方、郡可分、木花、野首、曾山寺、子供の園、納屋向などを挙げる事が出来る。このうち松添貝塚の資料と関係の深いものは、曾井、野首、納屋向等にみられた貝殻文系の土器及び、宮崎空港より出土した突帯上に刻目を持つ粗製深鉢の縄文晩期の資料である。前者は、南九州土着の土器であって、市来式、草野式の系譜上にある1群であり、後者は黒色磨研の精製土器に後続する夜臼式の資料である。その他、当遺跡の北面から1群存在した古墳をはじめ宮崎市の南部郊外に散在する若干の古墳や、平安時代前半に比定される松ヶ道の須志器窯址や平安時代後半以降の木花窯窯も注目してよい遺跡である。



第1図 松浜貝塚位置図

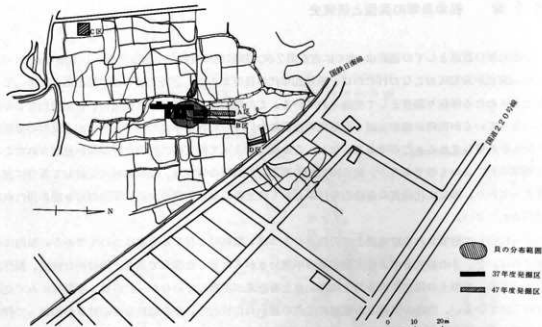
第2章 松浜貝塚の発掘と研究史

松浜貝塚の遺跡としての確認は、すでに古く第2次大戦以前に青島の土器散布地として知られていた。発掘調査が最初におこなわれたのは、昭和20年度の後半であり、宮崎大学の田中熊雄氏らによって、数地点にわたる発掘調査として実施されている。この原出土した資料は文化遺物、自然遺物など多岐にわたっているが当時の地形実測と発掘区の位置についての記録が不備の由であり、出土資料の重要性にかんがみ惜しまれるところである。なお、この調査によって縄文時代晩期の好資料が確認されたことは特筆されてよいものであろう。従来南九州の石器時代貝塚の研究は、他の地域に比較して多分に遅れをとっており、縄文文化研究の基礎的な作業としての土器の編年研究の上に、空白部分を埋め得た点は評価されてよい。

土器に関して指摘される研究史上の問題点の1つは、組織度を有する土器についてである。単的に指摘すれば、2、3の研究者による土器認識の不充分さがもたらした混乱である。層位的な観察、製作技術上の観察、形態上の観察の総合の上になつた土器認識が定着していなかった点は、学史的な克服されてきているが、当時の形態上の観察に主点の置かれた状況に、その観察自体の甘き加わって押型文土器と見あまたった点は、押型文土器研究の変遷とも関連して、過去の1時期の実体をうかがわせている。すなわち九州の押型文土器中には、後晩期に属するものがあるとする見解が当時まで残存していたことを示している。その後の研究の成果は、九州押型文土器も特異な様相を持つものではなく、後晩期まで系譜を見出すことの出来ない点をあらかじめしていることは、すでに周知の事実となつている。

昭和30年代に入ると縄文文化の研究は、全国的にその起源の研究と終末期の研究に重点が置かれると共に各地における編年研究の整理が進んだ。特に九州においては、芹沢長介、藤木義久らによる長崎県福井四穴の調査をはじめとする後期旧石器時代の研究と土器起源の問題についての研究の進捗には見るべきものがある。また北九州における縄文後晩期の調査は、後遺跡、山ノ守遺跡、原山遺跡等によって代表される成果として知られる。この後者の研究は、九州各地に大きな影響を与え、当松浜遺跡の研究にも1つの課題を提供し、費川光夫を中心とした筆者らによる昭和37年度の発掘調査を生むに至った。その年の発掘調査は当松浜貝塚の研究史上、重要な意味を持つものであり、特に層位的な観察と、出土人骨の観察に画期的なものがあつた。層位的な観察によって得たものは、縄文後期終末に位置する西平Ⅰ式が下層に検出され、上層に縄文晩期前半の群の資料を確認し得た点である。この晩期の一群は、南九州における貝殻文系土器の終末と黒色磨研精製土器の共存関係の確認であり、当松浜貝塚を標式とする松浜式の設定を可能とし、南九州における縄文文化の編年上に一定の資料を提供し得たことは、その後の研究によって明らかとなつたところである。このことは、納屋向遺跡の発掘調査によって実証されたところである。

以上の研究史をふまえて、宮崎市教育委員会の主催する発掘調査が昭和47年度に実施されるところとなつた。この調査の端緒は、青島周辺の開発の急進があり、観光開発に関連して遺跡周辺の土地利用が、如地から他に転化する恐れが十分に予想された点にあつたことは、誰しも認めるところであろう。以下に示すところは、本調査を中心に従来成果の一部を括めるものであり、南九州における石器時代貝塚の研究に意のあるところであろう。



第2図 松浜貝塚地形図

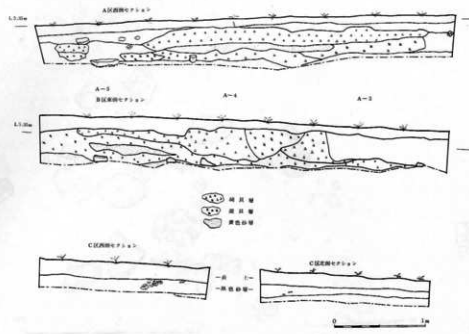
第3章 遺跡

第1節 包含の状況

松浜貝塚の名称は、縄文時代の貝塚をもった本遺跡の総称として使われているが、貝塚それ自体の規模は、貝層の分布が示す通り、東西約12m、南北約18mの長楕円形の地域に限定されているのであって、この地域を含めて地表に散布する土器片、石器片の拡がりか東西約180m、南北約200mに及んでいることからすれば貝塚を含めて、その全体を松浜遺跡と呼称に従って置くことにする。遺物散布の状況は、南西部のブロックと北東部のブロックの2ヶ所を中心にもられるもの、ききに触れた規模で全般的に散在する。

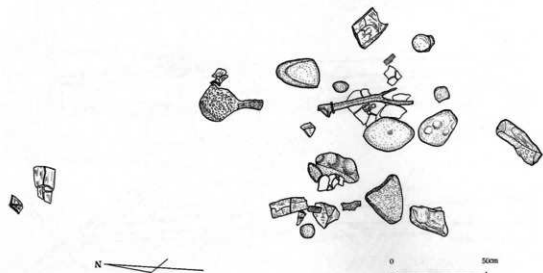
広範囲から採集される資料によれば、全体として後、晩期の遺跡と云えるが、地域によって若干の差が認められる。このことは、黒色磨研の精製土器の有無として確認されるのであって、遺跡の東北部に寄って、より長期間にわたる遺物が採集されたことを意味する。このような遺跡内部の地点差は、発掘調査によっても実証されたところである。

遺跡は、南北に走る規模の小さい海岸砂丘上に位置しており、その西側は、畑地→水田→低湿地を見、蛇行して東北流する知福川を控える。北及び南側に低丘陵が迫り、東側には、国鉄日南線及び国道220号線を挟んで、青島一子供の国の海岸線を持つが、この間の沖積地は、畑地から宅地への転用が順に進んでいる。なお、遺跡近辺の標高は、6m前後を実測するが、貝層の最上層では5.15mの絶対高を示している。

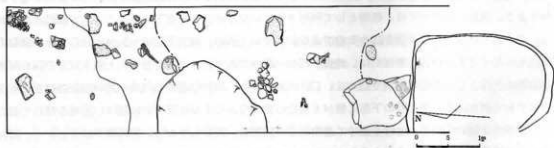


第3図 土層図

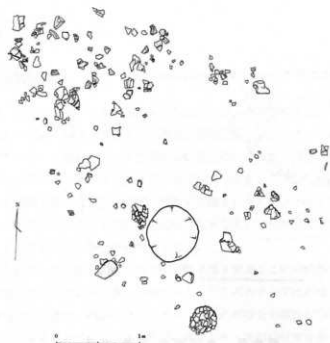
遺物の包含は、貝層を持つ地点A、B区と貝層を持たない地点とは、大きな違いをみせている。貝層を持つ地点では、多量の自然遺物が包含されているが、貝層を持たない地点では、発掘区に関するかぎり、自然遺物の検出はない。自然遺物の有無にかかわらず、文化層の層位的な区分を確認した貝層を持つ地点と単一の文化層のみを包含した貝層を持たない地点の差は重要である。貝層を持つ地点の下層の資料は貝層を持たない地点の単一の文化層に相当するのであって、上層の資料に相当する文化層は、貝層を持たない地点の発掘区に関するかぎり検出されていない。貝層は、純貝層と破砕貝層に区分されるが、安定した状態で検出された純貝層は、砂層から成る間層を挟んで、2枚に区分され、破砕貝層の上面に対応する間層を形成した砂層の上面は角礫や円礫を同一レベルに安定して出土するところから、一時期の生活面を想定するのに充分である。このことは図示したA区西側の断面図によってもうかがえよう。発掘区のすべては、畑地として利用されていたため、地表直下は耕作によって攪乱されており、その直下に遺物の包含層を認めるのであるが、その上面は、地表下20cm~30cmにはじまり、遺物の検出をみなくなるのはA、B区では、地表下70cm~80cmであり、この面で全体に人頭大以上の礫や単純な白砂を主体として海岸堆積物を認める。C区においては、単純な遺物包含層が20cm前後の厚さで形成されており耕作による攪乱層の下部に擴がり遺物の検出をみなくなる面での砂層は、黒味を減じて黄白色の砂層へと続いている。全体を通じて遺物包含の状態は、安定しており、宮崎県下はもとより、南九州の縄文時代遺跡のうちでも最も良好な遺跡の1つといえよう。



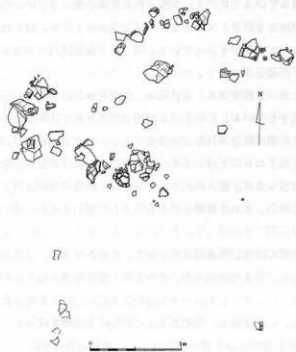
第4圖 A区出土狀況



第5圖 B区出土狀況



第6圖 C区包含層中、上部出土狀況



第7圖 C区包含層中、下部出土狀況

第4章 遺物

第1節 文化遺物

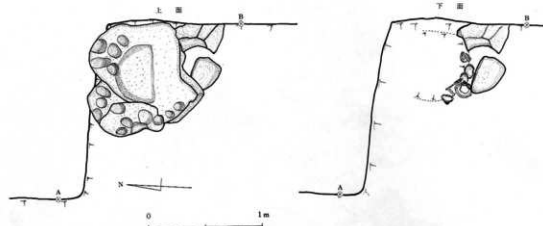
土器及び土製品 出土の土器のうち、主体をなしたものは、形態的には深鉢形土器と浅鉢形土器であり、施文と整形よりみれば、貝殻土器と黒色磨研の精製土器が特徴的である。

A・B両区においては、上層の一群が黒色磨研の精製土器に貝殻土器が伴出し、下層になると黒色磨研の精製土器が姿を消して、貝殻土器に若干の沈線土器を伴う状態で出土している。C区においては、文化層として確認された土器群は単純に貝殻土器といえるが、その下部に数例の沈線土器が検出されており、このことがそのまま層位的な前後関係として、黒色磨研精製土器→貝殻土器→沈線土器の順で古くさかのぼることをうかがわせている。

黒色磨研の精製土器は、単純に分離された1枚の文化層を形成している状態での検出ではなく、貝殻土器に伴出する状態で出土しており、A、B両区の発掘区内のすべてにわたってそのことが確認される。出土の黒色磨研精製土器は、浅鉢に限られるが、若干の形態上の変化が指摘される。この変化は口縁部の整形に集中的にあらわれている。また肩部に縷ネクタイ状の貼付文を持つ資料は、やや深みのある浅鉢であって被状口縁を持つ点でも他と区別される。

貝殻土器は、深浅形土器に限られ、口縁に平行する一段または二段の貝殻腹縁による押圧列を持つ点に斉一性がみられる。貝殻腹縁として確認される施文の上下を細い沈線で区画する例や、押圧列の下側に一本の沈線を持つ例があるが、すべて同様の貝殻条痕を施する点でも共通しており、一括して扱うことが出来る。器形は単純な深鉢といえるが、肩部から口縁に直行している例や貝殻列のみられる位置をややくぼめて肩部としている例があるが、ともに口縁部は単純であって、肥厚する例や、またく字形に屈折する資料は出土していない。底部も平底に限られている。貝殻条痕のみがみられる土器も多量に出土しているが、器形の変化に特異な例はない。貝殻条痕を肩部以上にもつ資料のうち肩部以下丸底の底部に至るまでの全面に組織織を有する資料がある。組織織自体に若干の変化があり、布状に近い組織の細い例や、網目状に粗い資料にわけることが出来る。網目状の資料のうち、網目が深く押圧されている資料が、かつて押圧土器と混同された資料である。回転押圧による施文でないことは、回転による施文の繰り返しが生ずるすべての部分に確認されないことでもあきらかである。以上の土器は晩期に属する資料で、これらの伴出関係を一括して松原式として扱うのを妥当とする。沈線文を有する土器は、く字形口縁で肩部までがすぼまり、肩部が丸味を持つ資料であって、肩部までに沈線文を施している。沈線文は、口縁に平行する一本と、首部にめぐらした2本の沈線間を縦位の短沈線で埋めることによって構成されている。また沈線中に数個の刺突を施す例もみられる。これらの資料は、後期末末に位置するものであり、西平Ⅱ式に比定される。

土製品は土器片利用の土器が数例出土したのとどまっている。



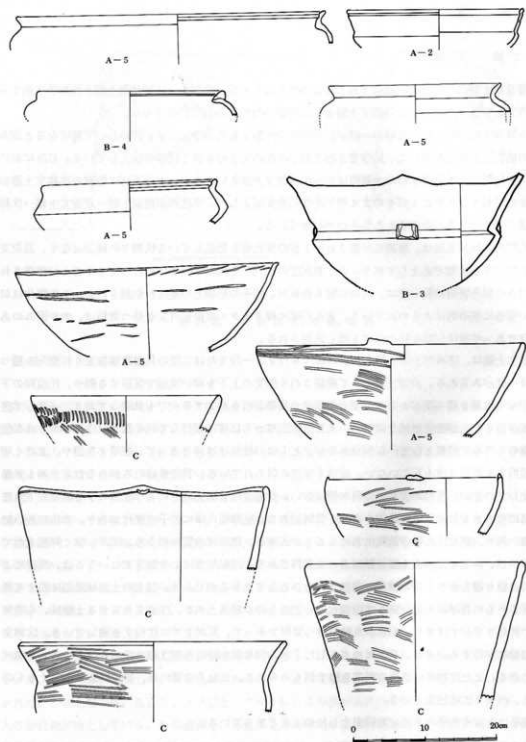
第8図 B区出土、石蓋、土塼

第2節 主要な遺構

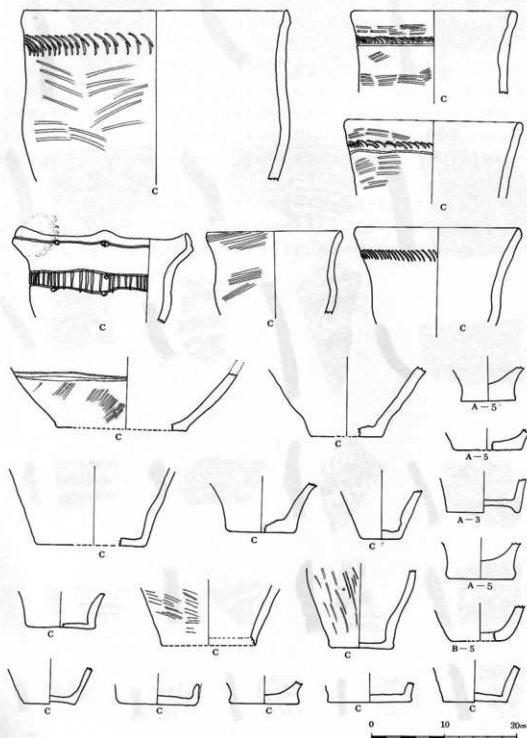
良好な遺物包含層を検出しているとはいえ、発掘された遺構の数は少ない。このことは、47年度の発掘調査においても、遺跡の保存を前提とすることで、確認調査にとどめ、極力後世に遺物を残す配慮をし、発掘区の拡大をしなかったことにもよっている。限定した発掘区内で確認された遺構のうち重要なものは、犬の埋葬遺構と、石蓋土塼である。

犬の埋葬遺構は、B区において検出され、長さ60cm、短径40cm、中央部での深さ20cm程の土塼に一体の犬が埋葬された状態で出土している。この土塼の周囲は若干乱れているが、その掘り方の面は、晩期の包含層中であって、縄文晩期に限定される犬の埋葬である。頭部と大腸骨がほぼ同一レベルにあって脊椎などが若干下位に出土していることは、埋葬の目的で掘られた土塼自体が中凹みであったことに対応している。なお出土の獣骨中には、数体の犬を認めるが、これらの資料は散在する状態で出土しており埋葬の状態はあきらかでない。まれに貝層の中から出土した黄石もその形態上の観察から犬の糞であることはあきらかである。

石蓋土塼は、犬の埋葬遺構に近接して検出されており、このあたりは、貝層の端が右の端縁に位置している。長さ70cm、短径50cm、厚さ15cm内外の、やや扁平な砂岩を蓋とし、その直下に浅い土塼が確認された。この土塼の縁に接して、アワビとハマグリ製の貝刃器が弧状に配置され、更にその外縁に人頭大の砂岩礫が出土している。この遺構も、石蓋の上面に晩期の包含層を認めたことによって、その時期の下限が限定される。なお土塼中には人骨の出土はなく、遺構の性格を決定するのは困難である。なお、この他の遺構は、部分的なものであって特定することは出来ない。図示したC区の出土状況によっても50cm内外の直径をもったピットがあるが、その性格についても将来の調査に期待する以外ない。



第9圖 出土の土器



第10圖 出土の土器

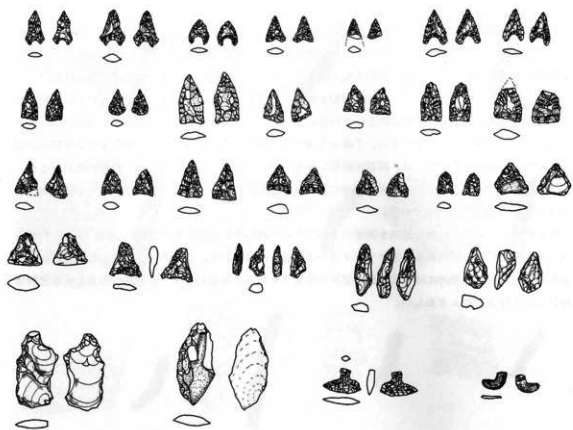


第11図 出土の土器断片

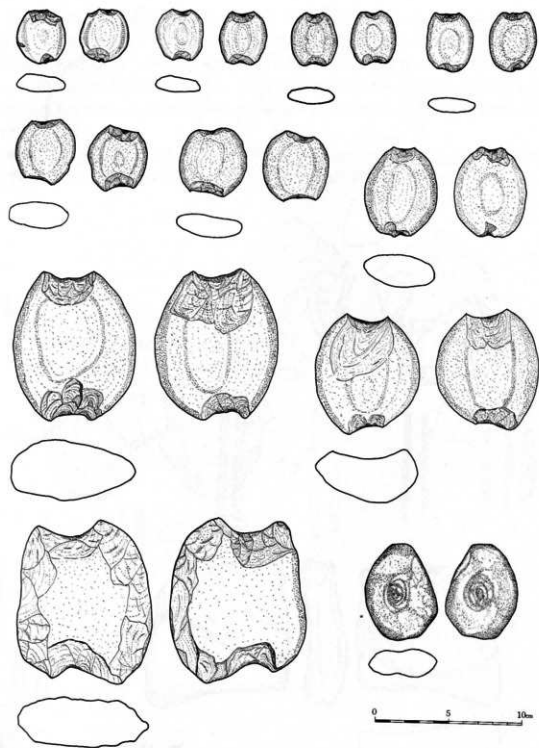
石器及び石製品 出土の石器には、石斧、石鏃、石匙、石鏃、凹石、磨石、使用痕のある刮片及び尖頭状鏃器がある。石斧には、打製石斧と局部磨製の石斧があるが打製石斧が多い。石鏃はチャート及び黒曜石製の資料が多いが頁岩製の資料も若干出土している。形態的には、図示した通り多岐にわたっているが、概して小型のものが多い。黒曜石製の資料のうちには、姫島産黒曜石を使用したものが含まれている。石匙は小型の模倣資料が出土している。チャート製である。出土の石器のうち大部分は石鏃であり、長軸が5cm以下の小型のもの、7cm～8cm大の中型のもの、10cm以上の大型のもの3種類に大別されるが、大型のものの中には、凹石に転用したものか、凹石から転用したものか両用の資料がある。頁岩質の石材を素材とした刮片の中に側縁に刃部を認める資料があり、サイドスクレパーと同様の用途のうかがえる資料も出土している。

厚みのある砂岩質の円鏃の周囲を両面から加工した石器のうち一部分を尖頭状に調整した資料がある。漁業用の石器の類例からしてアワビオコシの用途が考えられる。石器には、蛇紋岩及び滑石を使用した重玉がある。形態的には杓状耳飾の破片を考えさせるが、周縁のすべてに研磨痕のみられる資料は原始勾玉と呼ぶのによさわい。

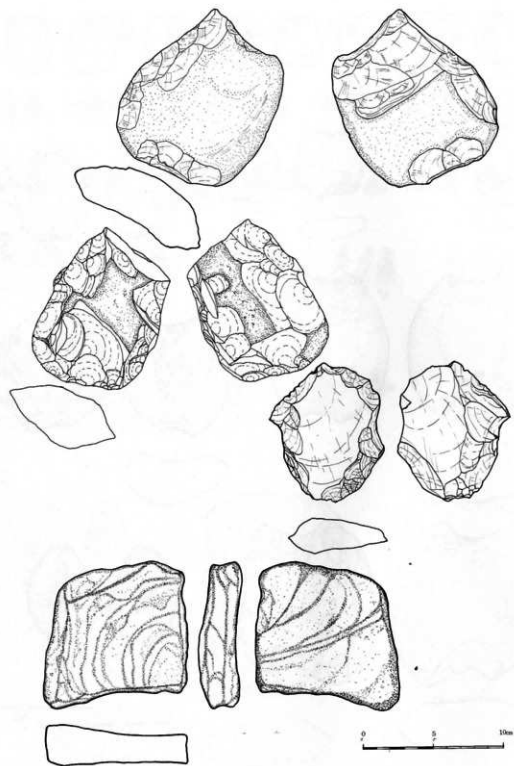




第 12 図 石鏢、スクレパー、石匙、磨玉、石弁



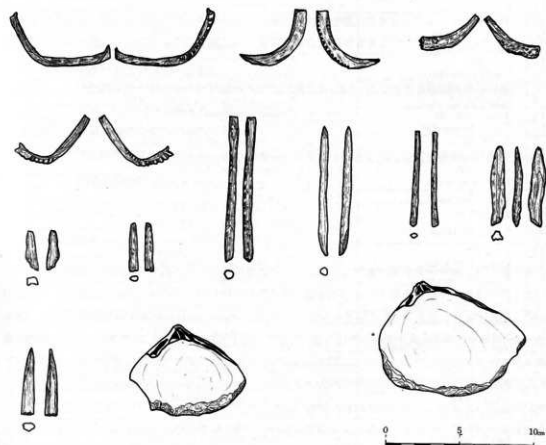
第 13 図 石鏢、凹石



第 14 図 尖頭状道具、サイドスクレーパー、磨石

骨角器 骨針、骨鏃、骨ペラ、鹿角製ヘヤーピン出土をみている。骨針、骨鏃、骨ペラ等は、普遍的にみられる資料であるが、鹿角製ヘヤーピンは類例のとほしい資料である。図版に示したように、頭部の加工は電頭を形成しており、その先端の中央部に小孔を認める。首の部分は両側から扁平に加工し、この部分の中央は小孔が貫通している。先端までは、徐々に細くなめらかに磨きあげられており断面は丸い。九州での類例は、福岡県下の鐘ヶ崎貝塚があるが、南九州では出土例がなく本遺跡出土資料のうちでも優品といえよう。

貝製品 ベンケイガイ、またはタマガイ製の貝製腕輪の断片が数例出土している。加工それ自体は粗雑であるが、すべての面を磨き上げている。またハマグリ製の貝刃器も数例の出土をみている。



第 15 図 貝輪、骨針、貝刃器

第2節 自然産物

貝類 貝類には、海産のものと陸産のものがある。これらのうち大量に出土しているのは、スガイ、インダタミ、レイシであり、次に示す一覧によってもあきらかのように外海性貝類の性格を出土の貝類がよく示している。

海産貝類	
1	インダタミ <i>Monodonta labio</i> (LINNÉ)
2	コシダカゴシゴラ <i>Omphalus rusticus</i> (GMELIN)
3	にしきうず科 <i>Chlorostoma lischkei</i> (TAPPARONE-CANEFRI)
4	Family Trochidae <i>Omphalus pfeifferi</i> (PHILIPPI)
5	ニシキウズ <i>Trochus maculatus</i> (LINNÉ)
6	サザエ <i>Turbo</i> (<i>Batillus</i>) <i>Cornutus</i> SOLANDER
7	ゆきのかさ科 <i>Mytella</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Ceclana nigrolineata</i> (REEVE)
8	Family Acaecidae <i>Mytella</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Ceclana soremsa</i> (REEVE)
9	みみがい科(あわびがい類) <i>Trochus</i> (<i>Nagafusa</i>) <i>Salculus superata</i> (LISCHKE)
10	Family Halistidae <i>Margaritana</i> (<i>Numbalis</i>) <i>gigantea</i> (GMELIN)
11	Family Turbinidae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Luella coronata coreensis</i> (RECLUZ)
12	Family Neritidae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Clithon sowerbianus</i> (RECLUZ)
13	Family Neritidae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Theisteyra albicella</i> (LINNÉ)
14	Family Neritidae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Serpulorbis imbricatus</i> (DUNKER)
15	うみにな科 <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Batillaria multiflorus</i> (LISCHKE)
16	Family patamididae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Cerithidea</i> (<i>Cerithiopsis</i>) <i>Cingulata</i> (GMELIN)
17	Family Cerithiidae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Cerithium</i> (<i>Cerithium</i>) <i>rhinoceros</i> (KIRA et HAEB)
18	Family Cerithiidae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Cerithium</i> (<i>Cerithium</i>) <i>rhinoceros</i> (KIRA et HAEB)
19	Family Cerithiidae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Cerithium</i> (<i>Cerithium</i>) <i>rhinoceros</i> (KIRA et HAEB)
20	Family Strombidae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Dolomena marginata robusta</i> (SOWERBY)
21	たまがいか科 <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Polinices album</i> (LINNÉ)
22	Family Naticidae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Neverita</i> (<i>Glossaulaxididyma</i>) (RÖDING)
23	たからがいか科 <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Talparia talpa</i> (LINNÉ)
24	Family Cypracidae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Arabica arabica asiatica</i> (SCHILDER)
25	Family Cypracidae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Bursa dunkeri</i> (KIRA)
26	あつきがいか科 <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Thais clavigera</i> (KÜSTER)
27	Family Muricidae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Rapana thomasiensis</i> (CROSSE)
28	Family Muricidae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Thais brevis</i> (DUNKER)
29	よどばがいか科 <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Siphonalia Cassidariaeformis</i> (REEVE)
30	Family Buccinidae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Bahylosia pellida</i> (KIRA)
31	Family Buccinidae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Nihoa livescens</i> (PHILIPPI)
32	いとまきざら科 <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Fusinus perplexus</i> (A.D.A.M.S)
33	Family Fasciolaridae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Fusinus nicobaricus</i> (LAMARCK)
34	Family Fasciolaridae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Pugilina</i> (<i>Heliculus</i>) <i>ternatatus</i> (GMELIN)
35	Family Fasciolaridae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Oliva mustelina</i> (LAMARCK)
36	Family Fasciolaridae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Antalis weinshufli</i> (DUNKER)
37	ふむがいか科 <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Amara</i> (<i>Scaphura</i>) <i>suberata</i> (LISCHKE)
38	Family Anadara <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Amara</i> (<i>Scaphura</i>) <i>broughtonii</i> (SCHRENCK)
39	Family Anadara <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Pecten</i> (<i>Notovella</i>) <i>albicans</i> (SCHRÖTER)
40	いたばがいか科 <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Margarita</i> <i>Crasostrea gigas</i> (THUNBERG)
41	Family Ostreidae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Urosalpinx</i> <i>Crasostrea nippona</i> (SEKI)
42	まるすだれがいか科 <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Murex</i> (<i>Murex</i>) <i>isurii</i> (RÖDING)
43	Family Veneridae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Cyclina orientalis</i> (SOWERBY)
44	Family Veneridae <i>Urosalpinx</i> (<i>Urosalpinx</i>) <i>Margarita</i> (<i>Margarita</i>) <i>Solen scrierius</i> (GOULD)
陸産貝類	
1	Family Neritidae <i>Mirus reiniana</i> (KOBELY)
2	Family Neritidae <i>Pupinopsis</i> (<i>Pupinopsis</i>) <i>sufa</i> (SOWERBY)

表1. 松浦貝塚出土貝類一覽表

獸類 シカ、イノシシ、アナグマ、イヌ、ウサギなどが出土しているが、もともと多いのは、シカ、イノシシである。なお犬の埋葬例はさきに触れた通りであり、犬の糞石とともに宮崎県下での最初の出土例である。海産の獸類では、クジラ、イルカ類が出土しており、大型の肩胛骨や肋骨では、たち割った際の痕跡が認められている。

魚類 クロダイ、インダマイ、スズキ、ブリ、マダラ、ベラ、フグ、エイなどが出土しているが、魚種不明の細片が多く、此後の検討がのぞまれる。以上の自然産物の他、海産で注意されてよいのはアカウミガメとムラサキウニであって、特に、後者の出土量は多い。

第五章 人骨

本人骨群は同一層中に獣骨と共に散乱し、しかも夫々可成り離れて出土した。これ等を採取、接着し得べきものは一括し、次の如き番号を施した。骨質は総て堅牢である。

No. 1. 前頭骨右半部の大部分

No. 2. *Bregma*を一隅とし、矢状縫合及び冠状縫合の左の一部を有する左頭頂骨の一部で、一辺41mm、他辺48mmの略々長方形の破片。

No. 3. 後頭骨鱗の大部分の破片

No. 4. 下顎骨体外部の大部分と、この歯槽部に釘植する歯牙が残存しているが、前歯数は死後脱落している。

以上につき概説する。

No. 1. 前頭骨

本人骨は鼻部、眼窩面の大部分及び眉間が破壊消失している。最も顕著なる所見は、成人骨であるのに前頭縫合の残存せる事である。これは縄文人にも現代日本人にも余り見られないものである。R. Martin氏の教科書(1928)の計測項目によってその数値を出力してみると(以下同様) Nr. 9, 最小前頭幅120mm(推定Nr. 10, 最大前頭幅120mm(推定)で、前者は可成り大である。Nationが失われているので詳かではないが、正中矢状前頭延長も、縦長も余り大ではない。前頭結節は可成り強く膨隆している。眉間の部分は、少しく突出していたと思うが、眉弓の発達には弱く短かい。左右眉弓の最突出点を結ぶと、眉間は少しくこの線より低いようである。眼窩上縁は水平に延び、露出せる前頭額縁は狭小である。以上、骨全体の性状よりして女性らしい点が多い。冠状縫合の癒着は、内外板共に開始せぬらしく、成人ではあるが、余り老年期のもではない。前頭骨頬骨突起は側頭線の発起点になるが、この部分が少しく変っており、既にこの部分で、上、下側頭線が完全に分離している。この形質は可成り稀なるものである。

以上の事實より本前頭骨は成年期以上余り老年期に至らざる女性骨と考えられ、少しく中頭型より長頭型に傾くと考えられる節がある。

No. 2. 左側頭骨骨片

本骨片は頰状で厚く、矢状、冠状縫合の癒着は、少くとも外板においては開始しないらしく、且つ、No. 1. 人骨とは、接着し得ないが個体の異なる事は明確である。頭頂粗性が見られ、内面には動脈溝が見られる。以上の事から、どうも男性らしいが、小破片なる為不明。余り老年とは思えない。

No. 3. 後頭骨鱗部

小破片となっているが接着し得た。Nr. 12. 最大後頭幅114mm、Nr. 228(4)、後頭骨正中矢状上顎延長75mm、Nr. 31(4)、同上弦長72mmで總て可成り大きな値をとっている。全体として可成り頑丈で且つ厚い。Inionの突出は余り強くはなくBroca氏の第2度である。外面の筋附着面の粗粒は強い。後頭骨の彎曲は少く見られるも、項平面は平坦である。外後頭隆は彎曲している。各項線の発達悪く、幸じて最上項線を見るばかりで、他は著明ではない。上、下後頭窩は深く、内後頭隆起は突出強し。人字縫合の外板は殆ど癒着を開始せず、内板若し癒合が開始していても極めて軽度である。本人骨は恐らく男性であろう。そして成人ではあるが余り老年ではない。何か少く中頭型より短頭型に近い頭蓋の様に思われる。

No. 4. 下顎骨骨体部

本下顎骨は極めて頑強である。正中矢状面近くで2分されているが、破損部もあるも接着し得た。両側共に下顎枝が無い。Nr. 51. 顔幅51mm、Nr. 69(1)、下顎体高(右)34mm、Nr. 69(3)、下顎体厚14mmで可成り大きい値をとる。頤隆起、頤結節の発達はよくなく、頤三角は著明ではない。即ち、頤部の発達は良好とは言えず、頤の前方突出は弱い。頤孔は第2小臼歯と第1大臼歯間の下部にあり、左側は上下の略々中央部にあり、右側の方が少く下方に移る。位置も大ききも左右非対称である。斜線の発達極めて良好、従って、大臼歯の歯槽部が左右側共に内側に突入し、齒列弓の形態は拋物線をなすのに、骨底は双曲線の一部に近い。次に内面では、頤棘はあるが、左右非対称である。二腹筋窩も深いのがこれ又左右が同一でない。舌下腺窩は浅く、顎舌骨筋線は粗粒が強い。以上の所見により男性の下顎骨である事は明かである。右側第1第2小臼歯歯槽部に、それより前後に伸びる2個の小丘状の連続せる下頤隆起を認める。

次に歯牙を見ると、右第1、第2門歯、左側では第1門歯より大歯に至るまで死脱落しており、抜歯の風習による抜去ではない。咬耗度を見ると、Broca氏の第2度より第4度に及んでおり、第2度を示すものは第3大臼歯のみで、他は極めて高度である。概ね水平に用耗し、鉗子咬合である事は歴然としている。前歯部が脱落しているので明確ではないが、咬合線は左右側第1門歯、左右側第1大臼歯を最前凹点とする3つの波状の階段が見られる。これ羅文人によく見られる用耗様式で、上顎歯牙が存在すれば必ず下顎のそれと反対の用耗を示すことは必定で、上顎歯牙と下顎のそれはその間に大なる間隙を作ることなく咬合するものである。右第3大臼歯頤側面に高度の齧歯を認める。

但し、可成り固い物を噛んで、歯牙を道具に用いたとは考えられ、その為に歯根部にまで用耗が及んでいる。歯牙を水平に切断せるや否や不明であるが、本人骨のみならず、羅文人の大部分が余りにも用耗されているところを見ると、何か切断も一応考慮に入れる必要があろう。これには一層の精査の上決定する必要を感ずる。本下顎骨は熟年期のものでと考えてよいであろう。

以上4個の人骨破片について論じたのであるが、どれがどの個体に属するかは明確ではないが、No. 1とNo. 2は同一個体ではない。No. 2 No. 3 No. 4が同一個体と考えてよいかも知れぬが、その確証はない。No. 1は女性骨らしく、他は男性と思われるものもあるので、結局2体乃至4体分の人骨と考えなければならぬであろう。推定年齢も、下顎骨は熟年期のものとするのが適当であり、他は成年期より余り老年期に入らざる年齢であると言う以外には確定不能である。

本人骨群は頭蓋の破片のみで、胴、四肢骨は見当たらない。この人達の胴、四肢骨は何処にあるか、これに関して松戸市子と清水水貝塚(加曾利E式並行)に2体、戸宮島袖ヶ窪貝塚Ⅱ内式並行に1体全く頭蓋がなく、胴、四肢骨は仰臥位をとり、且つ全く攪乱のない人骨を経験している。これ等は、本人骨群と全く対蹠的である事が興味深い。この辺に何か解決の糸口があるかも知れない。又、本人骨群は他群骨と同様な取扱いを受けて散乱している。この事に關しては、食人の風習、埋葬されたものが偶然の機会に出土して散乱人骨となったかの両者が考えられるが、このいづれかに決定するには時日を要しよう。

以上を總括するに、

- 1) 本人骨群は2体乃至4体分あり、成年期より余り老年に入らざる人達である。女性が1体あり、他は男性の様に思われる。
- 2) 女性と思われる前頭骨には前頭縫合残存し、男性の頰状下顎骨は鉗子咬合型であり、抜歯の風習はない。
- 3) 頭蓋破片のみ散乱している理由は目下不詳である。

土器を中心として、本遺跡の出土資料を検討するとき、さきに触れた具敷文土器の南九州における編年の位置がまず検討されねばならない。従来知られている南九州の具敷文土器は、早期の石板式、前期の吉田式、前平式、塞ノ神式、中期の並木式、岩崎下層式、後期の岩崎上層式、綾式、指宿式、下弓田式、市木式、草野式など、早期から後期まで、土着の土器として、一連の系譜をたどることが出来るが、これらの出づらについての検討や、その終末の状況については、多くの問題を残しているところであった。早期の石板式もその位置は、後半よりさかのぼることは出来ず、押型文土器との関係について明確さを欠いている状態である。轟貝塚の下層より検出されている糸原地の尖底土器は、鹿児島県下でも出土例が増しつつあるとはいえ、その共伴関係や押型文土器との層位関係が十分に確認されている例はなく問題を残していることはあからかである。押型文土器についての研究はかなり進展しているが、具敷文土器との関係については将来の発掘例をまたねばならない状況にある。ただ押型文土器のうち尖底土器について言えば、尖底という器形上の特徴を無視することは出来ず、この器形を重視するさきより、具敷文を有する尖底土器としての取所式の存在には注意せねばならない。取所式が吉田式に先行することは、充分に考えられるところであるが、これと層位的な保障が発掘調査によって得られていない。したがって具敷文系土器の出自については、なお検討されねばならないわけである。

一方、具敷文系土器の南九州における終末を後期後半以後の状況についてみると、く字形口縁のよく発達した市来式土器から、その進化形式として、く字形口縁を消し、単に口縁部を肥厚させるにすぎない草野式へも推移していることは、層位的にも確認されることである。このことは、磨光縄文土器との共伴関係においても、綾式に共伴する福田KⅠ式をはじめ、指宿式に伴う鐘ヶ崎式、西平式の磨光縄文土器が市木式に伴う西平式を最後に草野式に至って共伴しなくなる状況に対応している。したがって絳輪施文としての具敷文が市来式を1つのピークとして退化していくに伴って、磨光縄文との共伴関係もみられなくなるのであって、縄文ころがしによる施文技法の退化に並行して具敷文の文化がみられることになる。

一方、縄文ころがしの技法、これを1つの縄文文化のトラディションとすると、西日本においては、晩期に入って急激にこのトラディショナルな技法が消滅して、それに代って無文化な黒色磨研の精製土器によって代表される一群の土器が出現してくる。瀬戸内における黒川式、九州における御領式の系譜上にある大石式、黒川式である。黒川式は単純に黒色磨研の精製土器を主体としており、共伴関係にある具敷文土器は皆無である。

以上のことを基礎に、本遺跡の土器群を検討すると、下層から出土した西平Ⅰ式にしても、縄文ころがしの技法がすでに失われている時期であり、その上層から出土した具敷文土器伴出した黒色磨研の精製土器は、無文化の著しい資料であってみれば、施文技法の点からも新しく展開する文化的な様相をうかがうことのできる資料といえる。無文化な黒色磨研の精製土器の出現が縄文ころがしの伝統的な施文技法として出て来た瀬戸内の様相や、北部九州の状況に対比して、市木式から草野式への展開の延長線上にある一群の具敷文土器を共伴して出土した本遺跡の状況は、まさに地域的な性格を示すものであって、土器文化にあらわれた地域性を示すものであろう。本遺跡出土の黒色磨研精製土器一群が、

本県出土の黒色磨研精製土器のうち最古の資料であることは考えられないのであって、このことから南九州の縄文文化は、土器を中心として考察するさきより、具敷文系土器の残存、すなわち縄文的なトラディションをより新しい時期まで残存させている点で特徴的である。これらのことは、南九州における縄文晩期の初頭に位置づけられる1群の土器として、本遺跡の資料を標式とする一形式の設定を妥当とする。さきに触れた黒色磨研の精製土器と特定された具敷文土器の共伴関係にある組合せをもって、松原式として扱う所以である。

結 言

松原貝塚は以上に述べたごとく、その規模が大きいが、それが注目される貝塚で、東西98m南北128mという広い地域を占めてをり、貝層の厚さも1mに達するもので、県内では勿論最大のものであるが、南九州においても随一の大きさであると言ってよいであろう。この貝塚は後方に高さ100mないし200mの山を背に、前は日向灘に面してをり、目の前に青島があるが、青島は標高5.7mで貝塚の位置している土地の標高と同じくらいであるから、この貝塚が形成された時期には、恐らく波間に隠れたり出たりしていたのであろう。貝塚のある畑は背後の丘地に北と西と南の三方を囲まれた格好の土地で、上の畑より一段低い畑である。だから一段高い畑に住居跡が幾つかあり、いわばここに部落がって、その部落の住民たちが食べ残りの貝殻や動物の骨などを捨てたものが貝塚となったのである。だからこの報告書は貝塚を調査した報告書ではあるが、実はこの貝塚を作った上の畑に住んでいた人たちの生活や行動文化を報告しているのである。

それで上の畑を畑と、あまり広い土地ではないから、大部落があったとは思われない。しかしこれは東を向いているから陽当たりがよく、海岸で岩が多いから魚介類は多いし、山を負っているから西風や北風を防いで住居の場としては適している。後方の山の向うには山や丘が続いて狩猟にも適当な所が多い。だが台風はまともには受けたであろうが、山の向うに避難することもできたであろう。だからこの部落はあまり大きくはなかつたとしても、部落の人たちは長くここに住んでおられると思われる。このことは貝塚から縄文晩期の具敷文土器と研磨土器という縄文晩期の土器を伴出することや、貝塚の規模が大ききことなどがこれを物語るものと思われる。

さらにこの貝塚の底には大小の石が南北に長く石を敷いたように、連なっているがこれは海岸にある自然の石の列でありと思われる。ここは天然記念物に指定されている隆起海岸と奇形波蝕岩(俗に鬼の洗濯岩)のあるところであるから、その基盤の砂岩と頁岩の互層のうち頁岩の層がこれであると思われる。そしてこの頁岩の層は貝塚の底、それは今の地表から1m以下にあるのであるから、貝塚が形成されたころは、この石の層は地表に現われていたはずである。

上の畑の住人たちは、なにも貝塚を造ろうと思ってやっただけではない。部落の申合せでもあって、やたらに食べかすを棄てる、糞がたかたり、ウシが発生して汚ないから下の海岸に近い所に棄てようということで、低い土地に投げ捨てる方が都合がよいのでみんないかに棄てたのが積って塚と

なったわけである。この貝塚のある畑は標高5.5mから7.3mであるから、それから1m余り低い頁岩の層は、ひよっとすると、そのころは波に上を洗われていたかも知れないし、また波は来ていなかったとしても、海岸の汀線からあまり遠い距離ではなかったであろうと思われる。それなのに上の畑に住んでいた人たちが低いところに投げ棄てた貝殻や獣の頭や魚の尻尾や骨などが積り積って1mにもなった間に、海岸は次第に沖に退ぞいて行ったのである。だからこの貝塚が形成されるには相当に長い年月が経ったことを推測することができるのである。

この貝塚から発掘された遺物は自然遺物と人工遺物に区別されるが、自然遺物はこの貝塚を形成した人々の食べたものがほとんど前に記されている陸棲動物、海棲動物といろいろあるが、特にこの貝塚では貝類が多い。これは岩場の礫が多く、これらの貝類は女や児童でも容易に捕り得るからで、男は狩りや漁に出たのである。もちろんこのほかに自然の木の実や果実、草根や海藻も食べたが、それらは後に残らない。特に犬が埋葬されていたことは、すでに家畜としての犬が飼われていたことを示すものとして注目される。また海棲動物のうちウニの殻まであるのにカニとエビの殻が見出されなかったことは、青島附近がエビの産地であることから不思議な感じがする。人工遺物は道具が主である。土器は物を煮たり、水を容れたり、物を入れたりするもので、焼きと文様の異なる二種類があり、文様では蝶ネクタイ形の模様をつけているものが特徴的である。石器は物を造ったり木を伐ったりする石斧、網のオモリに用いる石錘、矢の先につけて狩りに用いる石鏃など生活上に必要な道具が多いが、碧玉のように装身具もある。また貝や動物の骨で作った貝ナイフや縫針などのほか腕にはめる貝釧もあった。また配石遺構に近いような石の配置や大きい石の下に歯の骨があって、この時代の人の信仰を示すかのようなものもあったが、明らかにするまでには至らなかった。

このようにこの調査では多くの得るところがあったが、これらによってこの遺跡は学問上に極めて重要なものであることが知られたが、われわれは調査期日が限られていた関係もあって、その一部分を掘ったのみで、発掘地点でも多くを残して置いた。従ってここにはまだ貝塚が立派に残っているのである。しかし青島は市の目玉的な観光地であるから何時開発の手が伸びて、これを破壊し去るかも知れないのである。それで今のうちに早く保存の方法が講ぜられることを期待して已まない次第である。

図 版

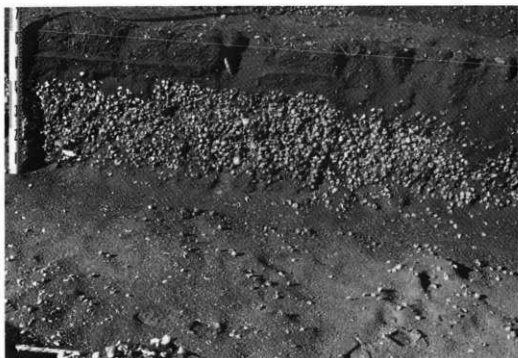




図版1) 遺跡遺景



図版2) A・B区の発掘風景



图版3) B区 贝石状态



图版4) B区 土层



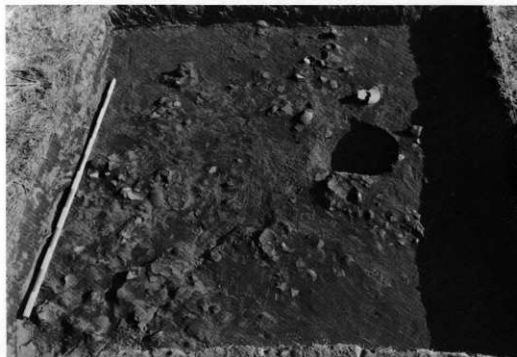
図版5) 埋葬状態で出土した犬



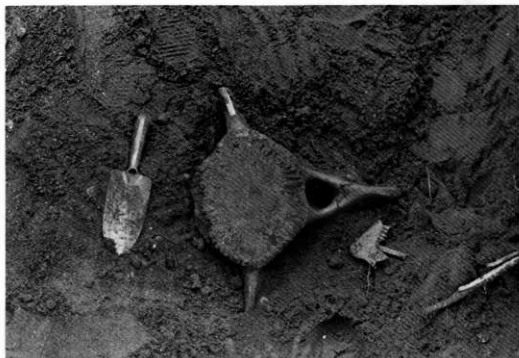
図版6) B区検出石蓋土坑



図版7) A区土器の出土状況



図版8) C区包含層上面の出土状況



図版9) 鯨骨の出土状況



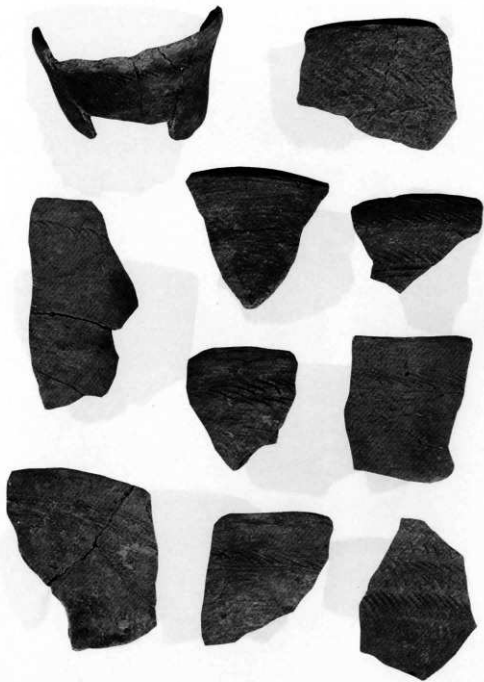
図版10) 鯨骨の出土状況



図版11 出土の土器



図版12 出土の土器



図版13 出土の土器



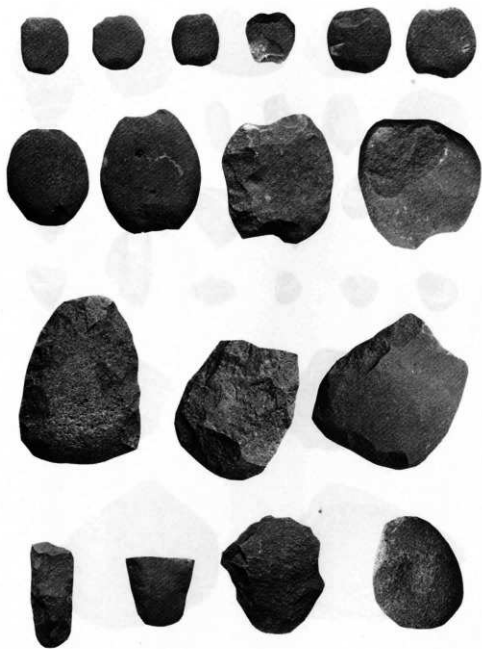
図版14 出土の土器



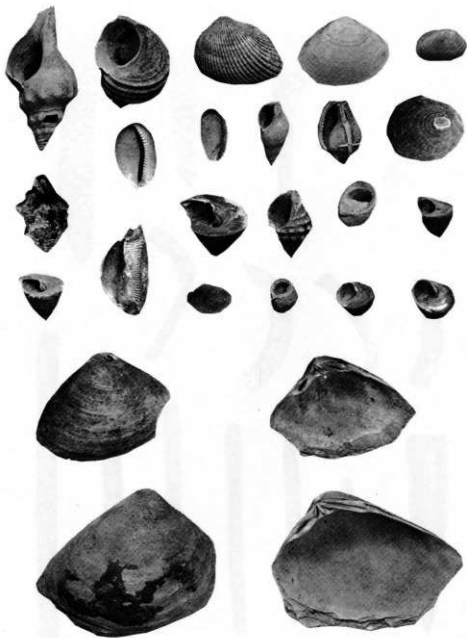
図版15 土器底部及び土石垂



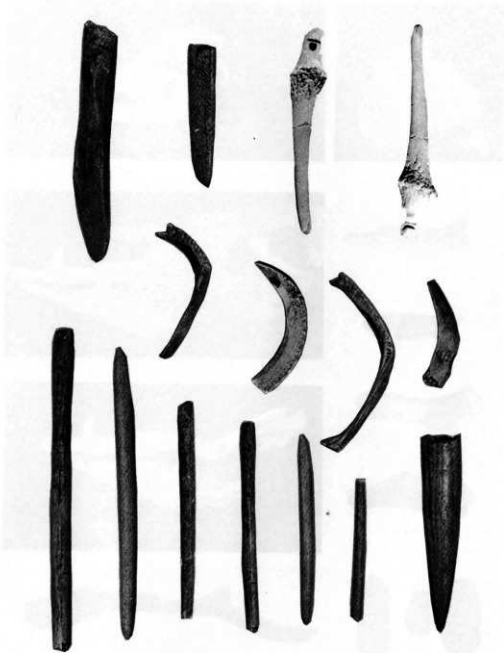
図版16 石鏃・石匙・スクレパー・垂玉



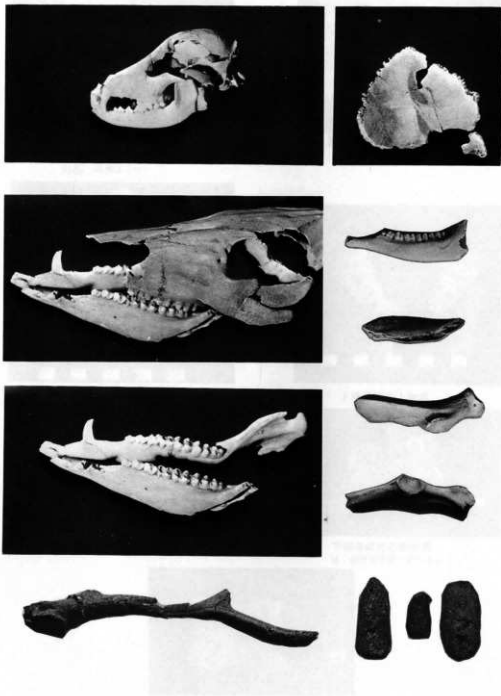
图版17 石锤·石斧·尖头状石器·凹石



図版18 出土の貝類及び貝刀器



図版19 鹿角製ヘアピン・骨ペラ・骨針及び貝輪



図版20 犬・イノシシ・鹿及び犬の糞石



前頭骨及び左頭頂骨破片
外面 (目盛は1cm)



後頭骨破片外面



後頭骨破片内面



下顎骨破片上面観



下顎骨破片前面観



下顎骨破片右側面観
註：歯牙咬合縁の波状を示す



下顎骨破片左側面観

調 査 団 の 組 織

調 査 主 体	宮崎市教育委員会
調 査 員	石 川 恒太郎 (文化財専門委員)
	鈴 木 重 治 (南九州大学助教授)
	安 楽 勉 (宮崎高等学校教諭)
参 与	小 片 保 (新潟大学医学部教授)
調 査 補 助 員	和 田 利 徳 (別府大学生)
	松 井 孝 之 ()
	平之内 幸 治 ()
	川 信 修 治 (南九州大学生)
	田ノ上 哲 (宮崎大学生)
協 力	坂 田 邦 洋 (長崎大学医学部助手)
	宮崎高等学校郷土史クラブ
事 務 局	宮崎市教育委員会教育課
	課長 曾 根 敏 爾
	補佐 小 田 実
	主事 野 間 重 孝 (発掘現場担当)

松原遺跡発掘調査報告書

昭和49年3月31日 発行

編集・発行 宮崎市教育委員会

印刷 赤沢印刷株式会社

宮崎市大工町142

